

島津雨（しまっあめ）

く雨を見つめ、水を思うく

「雨は愛のようなものだ」
室生犀星の「雨の詩」の言葉です。

間もなく梅雨入り。先日、魚見岳に登りましたが、市街地や遠くの開聞岳は雨に煙っていました。

鹿児島では雨が降ると「島津雨」と呼んで縁起が良いとされています。祝い事の日に雨が降ればいっそうめでたいそうです。どうやら、島津家初代当主・忠久の生まれた日が雨だったことに由来するようです。

雨の情景は人それぞれであり、雨を詠った詩や歌は実に多くあります。雨模様だと自分の都合で「あいにくの」と言ってしまうがちですが、近ごろの天候異変で「愛のような雨」に共感する人も多いのではないのでしょうか。

ところで、日本が輸入する農畜産物、工業製品の生産に必要な水の量は、年400億^m以上だそうです。「仮想水」といわれるこの水は、日本が



雨に濡れるアジサイ

輸出する量よりも輸入が多いことから、実は日本は「水の輸入国」であるらしいのです。今回の東日本大震災で、多くの人命を奪った水（海水）。しかし、一方で被災者が最も必要としているのも水（飲料水）でした。豊かな水に恵まれた故郷・指宿に住む私たちは、あらためて水について考える必要があります。

梅雨を「雨見時」とも呼ぶそうです。犀星の「雨の詩」は、「永い間、雨をしみじみと眺めていた」と結んでいます。降る雨や海を見つめる余裕を持ち、「水」に思いをめぐらせる6月です。

指宿市長 豊留 悦男